

美術教育史研究部会

戦後日本美術教育史研究の視座を探る

Exploring the Perspectives of Research

on the History of Post-War Art Education in Japan

赤木 里香子

AKAGI Rikako

岡山大学

OKAYAMA University

1. はじめに

本研究部会ではこれまで度々、参加者全員でひとつの資料を読み解く試みを行ってきた。今回は、近年進展しつつある戦後美術教育史研究に関連して、特に戦後初期の状況を照らし出すものを取り上げる。

2. 資料紹介

最初に話題提供として、1949（昭和24）年の『教育美術』9月号に掲載された、森桂一（もり けいいち：1904(明治 37)～1988(昭和 63)年）による「隨想 圖畫は必要か」（32, 33頁）について触れる。

筆者の森桂一は岐阜県恵那市出身、1928（昭和 3）年東京美術学校図画師範科を卒業し、1940（昭和 15）年千葉県師範学校に着任した。1943（昭和 18）年4月の師範学校官立化を経て、戦後の新制千葉大学教育学部（1950 年学芸学部より改組）でも教授を務めた（1970（昭和 45）年退官、同大学名誉教授）。著書に『美術と教育の間』（展望社、1963 年）、倉田三郎との共編『美術教育概説』（美術出版社、1961 年）がある。この記事での肩書は「千葉師範学校教授・光風会会員」となっている。

冒頭で森は、総合雑誌『改造』（改造社）の1949年7月号に掲載された「日本および日本人」と題する座談会記録のなかの画家梅原龍三郎の発言を取り上げている。

この座談会メンバーは梅原のほか、小説家志賀直哉、経済学者で当時日本芸術院院長の高橋誠一郎、小説家武者小路実篤、小説家廣瀬和郎の5名で、戦後社会に関する話題のうち「学校の絵画」について主に梅原と志賀が発言した。

梅原が在職していた東京美術学校（1949年5月より東京藝術大学）には、都府県の図画教師が委託生として研究に来ていたが、図画教育に対して少しも自信がなく、「何を教えていいか解らない」という。梅原は「それはやはり事実で、図画という教科があるということはむしろ間違っているんじゃないかな。そういう事は子供の自由に任しておいて、要するに美術史でも教えるといったような事にした方が意味があるんじゃないかな。」と語り、志賀は相槌を打つ。

これに対して森は、筋道立てて反論しているわけではない。だが、図画教育に二十年来携わった「一教育者」としての見解が率直に述べられ、そこから当時の美術教育の様相を探る手がかりが得られる。詳しくは部会で紹介し、共有したうえで討議に進みたい。

3. ディスカッションのテーマ（案）

本資料をどのように捉えることができるか、参加者による知見を重ねあわせ、また素朴な疑問や気づきなども受け容れながら、以下のようなテーマを論じることを予定している。

- (1) 戦前・戦中の美術運動（白権派）や美術教育運動（自由画教育）と戦後美術教育との関係
 - (2) 普通教育における美術教育と、美術学校に代表される専門美術教育を区別して考える必要性と、両者をどう接続するかという課題
 - (3) 表現技術と描画材料の関係
 - (4) 教育者であり作家でもあるという美術教育者のアイデンティティ
 - (5) 戦中・戦後の鑑賞教育の隆盛とその挫折
- 部会員の皆様と、上記テーマに興味をお持ちの皆様のご参加をお待ちしております。